

2017 年 10 月に相次いで横浜市立野毛山動物園に保護された 3 種の海鳥

田窪 憲一郎・小野 香織・百武 真梨子・宗正 敏子・五十嵐 真由美・齋藤 信

Kenichiro Takubo, Kaori Ono, Mariko Hyakutake, Toshiko Munemasa,
Mayumi Igarashi and Makoto Saitoh:

Three species of drifted seabirds rescued successively to Yokohama
Nogeyama Zoological Gardens in October 2017

はじめに

神奈川県横浜市に所在する野毛山動物園（以下当園と称す）では神奈川県より県内で保護された野生動物の傷病鳥獣救護事業を受託している。台風の接近時には、しばしば風に煽られた海鳥が保護されることがある。2017 年台風 21 号（アジア名：Lan）は 10 月 16 日にフィリピンの東の海上で発達し、23 日午前 3 時頃静岡県掛川市付近に上陸し、神奈川県、東京都を通過、同日 8 時頃に茨城県日立市沖に抜けた。最大風速は 50 m/秒、最大強風域半径 850 km、最低中心気圧 915 hPa の超大型台風であった（気象庁、2017）。この台風 21 号の本州接近、上陸時に、コアホウドリ *Phoebastria immutabilis* Rothschild, 1893, コシジロウミツバメ *Oceanodroma leucorhoa* Vieillot, 1818, シラオネツタイチョウ *Phaethon lepturus* Daudin, 1802 の 3 種 3 羽の海鳥が横浜市で相次いで保護されたので報告する。IUCN レッドリストにおいてコアホウドリは

準絶滅危惧種 (NT), コシジロウミツバメは危急種 (VU) に指定されている (IUCN, 2018)。我が国のレッドリストにおいては、コアホウドリは絶滅危惧 IB 類 (EN) に指定されている（環境省、2018）。

保護・放鳥の経緯及び同定

・コアホウドリ *Phoebastria immutabilis*

2017 年 10 月 17 日横浜市中区の路上で保護された。海釣り施設にて放野したものの、一晩飛翔しなかったとのことで 10 月 18 日に当園に持ち込まれた（図 1）。

体長は約 80 cm であった。頭部、腹側面、腰部等全体的に白色で、左右翼間の背部は黒色であった。翼上面は黒く、下面は白色で黒い縁取りが見られた（図 2）。また眼の吻側が黒く、嘴は淡紅色で、吻先は灰色であり、上顎嘴端はかぎ状であった。外鼻孔は吻端に向かって開口し、左右の鼻孔は離れていた（図 3）。跗蹠より遠位は無羽で、皮膚色は灰白色、趾は三前肢かつ蹠足で



図 1. 保護されたコアホウドリ。



図 2. コアホウドリ腹側面。



図3. コアホウドリ頭部正面。

あった。尾は円尾で、尾端が黒色であった。アホウドリ *P.albatrus* Pallas, 1769 の幼鳥は頭頸部背側が黒く、ワタリアホウドリ *Diomedea exulans* Linnaeus, 1758 は翼背側が白く、眼周囲も白いことから、本種をコアホウドリと同定した（高野, 2012）。

性別は外貌からは判断できなかった。衰弱を避けるために外部計測は実施しなかった。保護時の体重は 1740g で、栄養状態が不良であった。

海鳥は、飼育下では竜骨突起部の褥瘡、趾瘤症、嘔吐による誤嚥を引き起こしやすい（Robinson, 2009）。また、当個体は保定時に抵抗する体力もあり、羽毛の撥水性も維持されていた。以上のことから長期飼育せず、早期に放野する方が野生復帰できる可能性が高いと判断し、皮下補液のみを行い、同日中に神奈川県三浦市城ヶ島より放鳥した。

コアホウドリは冬季にハワイ諸島、ミッドウェー島及び小笠原諸島の一部で繁殖し、夏季はベーリング海で生活することが知られている（del Hoyo *et al.*, 1992）。本種は神奈川県内においては三浦市城ヶ島で定期的に観察される他、数件の救護記録がある。コアホウドリが救護される時期は春季（4, 5 月）及び冬季（11 月～1 月）に集中していると報告されており、2004 年 12 月には台風の影響で相次いで 3 羽が保護されている他、2008 年 5 月には強い南風が吹いた後に 2 羽が保護されている（日本野鳥の会神奈川支部, 2013；加藤, 2011；加藤・露木, 2006）。

・コシジロウミツバメ *Oceanodroma leucorhoa*

2017 年 10 月 23 日横浜市中区の集合住宅の通路にうずくまっていたところを保護された。保護した市民が動物病院に持ち込んだが、特に処置はされず、同日中に当園に持ち込まれた。

体長は約 20 cm であった。頭部から尾にかけて全身が黒色であるが、翼上面の小雨覆及び中雨覆は淡色で黒褐色であった（図 4）。尾は凹尾で上尾筒が白く、その正中部分に褐色の縦線があった（図 5）。嘴は全体が黒く、外鼻孔の形態は管鼻であった（図 6）。跗蹠より遠

位は無羽で、皮膚色は黒色、趾は三前趾かつ蹼足であった。性別は外貌からは判別できなかった。類似種として上尾筒の白いアシナガウミツバメ *O. oceanicus* (Kuhl, 1820), クロコシジロウミツバメ *O. castro* (Harcourt, 1851) があげられるが、前者は本個体と異なり角尾であることから除外した。後者は本種に比べて尾の切れ込みが浅い点、上尾筒白色部が四角くみえる点、上尾筒の中心に褐色縦線がない点から除外した。以上のことから本種をコシジロウミツバメと同定した（高野, 2012, 箕輪, 2007）。保護時の体重は 36.2 g であった。胸筋は菲薄で、削瘦していたが、外傷はなく、元気もあった。外部計測は実施しなかった。オキアミを給餌するが自力採食しなかった。皮下補液・経口補液のみを実施した。

コアホウドリと同様に長期飼育を避け、翌日 10 月 24 日に神奈川県三浦市観音崎より放鳥した。

コシジロウミツバメは夏季に北海道大黒島や岩手県三貫島で繁殖し、冬季は熱帯の海上で生活する（高野,



図4. 保護されたコシジロウミツバメ翼背面。



図5. コシジロウミツバメの尾部背側。



図6. コシジロウミツバメ頭部。

2012)。県内においてはその観察例の殆どが9月下旬から11月上旬の秋季に集中しており（日本野鳥の会神奈川県支部，2013），今回の事例は時期が合致している。

また，1972年10月に本種の台風通過後の大量内陸迷行が記録されており，東海から南関東の300 kmの範囲に渡って60羽以上が観察または保護され，そのうち12羽が神奈川県内で保護された（中村ら，1983）。

・シラオネツタイチョウ *Phaethon lepturus*

2017年10月24日に横浜市鶴見区の路上で保護された。保護者の下で保温の処置を行った後，同日中に当園に持ち込まれた。

当個体は全身が白色で，背側および頭頂部，頸部上部には黒い横斑があった（図7）。腹側の羽は一様に白色であった（図8）。初列風切の遠位側1～4枚目の先の前縁は黒かった（図9）。過眼線の吻側は黒色三日月型，尾側は後頸部で連続していなかった。嘴は縦に扁平で先端は鉤曲せず鋭利であり，全体的に灰白色で先端はやや黄色く，下嘴はやや肉色を混じていた。外鼻孔は細裂型で左右開放であった（図10）。尾羽は正中が一番長く扇状の凸尾で，各尾羽先端には黒点が1～2個ずつ認められた（図11）。跗蹠より遠位は無羽で全蹠足，皮膚色は

各趾の第一関節まで肉色で，それより遠位は黒色であった。外貌から性別は判定できなかった。

趾や嘴の形態から，本個体はネツタイチョウ科の鳥類であると判断した（del Hoyo *et al.*, 1992）。ネツタイチョウ科はアカハシネツタイチョウ *P. aethereus* Linnaeus, 1758，アカオネツタイチョウ *P. rubricauda* Boddaert, 1783，及びシラオネツタイチョウの3種が知られている。本個体はネツタイチョウ科の成鳥に特徴的な細長い正中尾羽を持たないことから，幼鳥であると判断した。アカハシネツタイチョウの幼鳥は嘴が黄色く，過眼線が後頸部で繋がることから除外された。アカオネツタイチョウは初列風切の前縁の黒斑の幅がシラオネツタイチョウと比較し狭いこと，嘴が黒色であることから，本個体をシラオネツタイチョウと同定した（富田ら，2017；del Hoyo *et al.*, 1992；Tuck & Heinzel, 1978）。外部計測は実施しなかった。保護時体重は186.7 gで，著しく消瘦していた。皮下補液を実施した。スメルトを与えると採食した。翌日10月25日に小笠原自然文化研究所の職員に引き渡し，小笠原自然遺産センター 動物対処室で治療の上，11月3日に小笠原村父島大村海岸より放鳥された。放鳥時の体重は226 gであった。



図7. 保護されたシラオネツタイチョウ。



図9. シラオネツタイチョウ翼背面。



図8. シラオネツタイ
チョウ腹側面。

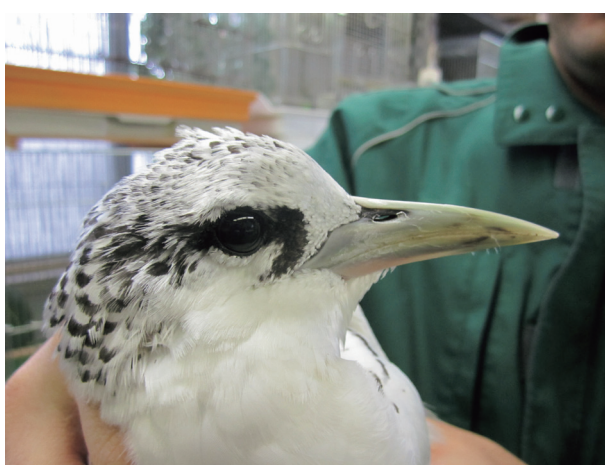


図10. シラオネツタイチョウ頭部。



図 11. シラオネッタイチョウ尾部。

シラオネッタイチョウは太平洋及びインド洋の熱帯の洋上の島で繁殖し、周年熱帯から亜熱帯にかけての洋上に生息する (del Hoyo *et al.*, 1992)。シラオネッタイチョウは本土では台風通過後に迷鳥として確認され、岩手から宮崎まで広い範囲で観察されている (日本鳥学会, 2012)。神奈川県での観察記録は 2004 年 10 月 10 日に綾瀬市で幼鳥の生態写真が記録されているのみであり (日本野鳥の会神奈川支部, 2013), 本報告が 2 例目となる。ネッタイチョウ科に属する 3 種の鳥類のうち、神奈川県下では他にアカオネッタイチョウの観察記録が 4 例報告されている (日本野鳥の会神奈川支部, 2013)。これらの観察記録を表 1 にまとめた。これらのアカオネッタイチョウ, シラオネッタイチョウの観察記録に加え, 今回の記録も含めてすべての個体が幼鳥であった (日本野鳥の会神奈川支部, 2013)。

考 察

コアホウドリが保護された 10 月 17 日には, 台風 21 号はフィリピンの東の海上に, それ以前に発生した台風 20 号は海南島付近で熱帯低気圧に変化しており, この時点で関東地方はこれらの影響を受けていない。保護日の前 2 日にかけ, 本州太平洋岸では 0 ~ 15 m/s の北東の風が吹いており, 伊豆大島では風速 10 ~ 20 m/s のやや強い風が北から北東方向から吹いていたのが記録されていた (日本気象協会, 2018)。一方, コシジロウミツバメ及びシラオネッタイチョウは台風 21 号通過直後の 10 月 23 日, 24 日に保護された。

神奈川県でのコアホウドリの以前の救護記録は春季 (4, 5 月) 及び冬季 (11 月 ~ 1 月) に集中している。今回のコアホウドリの救護事例は 10 月中旬と, 他の事例とはやや時期が離れている。また, 以前に救護された時と気象条件も異なっている。以前の救護記録は台風の直後や強い南風が吹いた後で発生しており, これらの救護個体は太平洋側から北上して落鳥したと考えられる。一方, この時には本州太平洋岸は台風の影響を受けておらず, 伊豆諸島の天候から海上で強い北風が吹いていた

表 1. 神奈川県におけるネッタイチョウ科鳥類の観察事例

種	観察年月日	観察/救護地点
シラオネッタイチョウ	2004/10/10	綾瀬市
	2017/10/24	横浜市鶴見区
アカオネッタイチョウ	1972/09/19	藤沢市
	1976/06/09	横須賀市
	1994/08/17	鎌倉市
	2004/08/24	相模湖町

ことが示唆される。これらのことから, 今回の救護事例は以前のもとは異なり, 繁殖地への渡りの途中で神奈川県よりも北にいた個体がなんらかの原因で衰弱し, 北風の影響を受け南下して落鳥したことが考えられる。

コシジロウミツバメについては, 救護事例は秋季に集中しており, 今回の救護事例も同様である。コシジロウミツバメはコアホウドリと逆に, 夏季に国内で繁殖し, 冬季は熱帯の海上で生活する。今回の事例は越冬地への移動と台風 21 号が重なったことで迷行したと考えられる。

シラオネッタイチョウも同様に台風の影響を受けて迷行したことが示唆された。ネッタイチョウ科の鳥類は渡りをせず, 熱帯から亜熱帯にかけての海域に周年生息する。神奈川県における観察事例はすべて幼鳥であったことから, これらの鳥は巣立ち後の若い個体が衰弱し, 悪天候に巻き込まれることで本土に迷入したと考えられる。アカオネッタイチョウは小笠原諸島の西之島, 硫黄列島, 南鳥島で繁殖が確認されているが, シラオネッタイチョウは国内での繁殖は記録されていない (日本鳥学会, 2012)。よって, シラオネッタイチョウの繁殖地の方がより離れている為に, 本土への迷行頻度が低いものと思われる。

台風の発生数および本土への接近・上陸数は 8 月をピークに 6 月から 11 月に多く分布している (気象庁, 2017)。県内のネッタイチョウ科の鳥類の記録 6 件は, いずれも 6 月から 10 月の本土への台風の接近・上陸が多い時期に集中している (表 1)。これらの鳥類は周年赤道付近の海域に生息し, 北上する台風巻き込まれて迷行すると考えられる。よって, 本県での観察事例数は台風の接近・上陸数と比例する傾向があると考えられる。一方で, コアホウドリ, コシジロウミツバメの迷行はこの時期に記録されたことがない。これらの種の内陸迷行は, 気象の影響に加えて, 渡りという生態の 2 つの要因が重なることで発生することが示唆される。

当園に救護される動物の殆どがスズメやタヌキなど, 都市に生息する普通種が大半を占めるが (田窪・鈴木, 2016), 稀に今回のような希少な動物が持ち込まれる機会がある。野外での観察例よりも詳細な記録を取ることが可能なので, 野生復帰という目的を見失わないよう, 個体の状態に注視しながらも今後は可能な限り多くの記録を集積していきたい。

謝 辞

保護された海鳥の放鳥にあたってご助言、ご協力いただいた特定非営利活動法人 小笠原自然文化研究所 鈴木 創氏、小笠原世界遺産センター 動物対処室 荒井和美氏、これらの鳥類を保護し、野毛山動物園にお持ち込みいただいた市民の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- del Hoyo, J., Elliott, A. & J. Sargatal (eds.), 1992. Handbook of the birds of the world. Vol. 1, pp. 696, Lynx Edicions, Barcelona.
- IUCN, online. 2018. The IUCN red list of threatened species. Version 2018-1. www.iucnredlist.org. (accessed on 2018- August- 23).
- 環境省, online. 2018. 【鳥類】 環境省レッドリスト 2018. https://www.env.go.jp/nature/kisho/hozen/redlist/RL2018_5_180604.pdf (accessed on 2018-August-23).
- 加藤千晴, 2011. 神奈川県自然環境保全センターに救護された傷病鳥獣の記録 (2008・2009 年度). 神奈川県自然環境保全センター報告, (8): 65–84.
- 加藤千晴・露木三津男, 2006. 神奈川県自然環境保全センターに救護された傷病鳥獣の記録 (2004 年度). 神奈川県自然環境保全センター報告, (3): 47–52.
- 気象庁, online. 2017. 過去の台風資料. <https://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/typhoon/index.html> (accessed on 2018- August- 23).
- 箕輪義隆, 2007. 海鳥識別ハンドブック. pp. 80, 文一総合出版, 東京.
- 中村一恵・堀 浩・大坂 豊, 1983. 台風によるコシジロウミツバメの大量内陸迷行について. 神奈川県立博物館研究報告, 14: 37–44.
- 日本鳥学会, 2012. 日本鳥類目録改訂第7版, xx+438pp. 日本鳥学会, 三田.
- 日本気象協会, online. 2018. tenki.jp 過去天気. http://www.tenki.jp/past/2017/10/?selected_type=chart (accessed on 2018-August-23)
- 日本野鳥の会神奈川支部, 2013. 神奈川県鳥 2006-10 – 神奈川県鳥類目録VI –. 362 pp. 日本野鳥の会神奈川支部, 横浜.
- Robinson, I. 2009. Seabirds. In Tully, Jr, T.N., Dorrestein, G.M., & A.K. Jones (eds.), Handbook of avian medicine. 2nd ed. pp. 377–403. Elsevier, Edinburgh.
- 高野伸二, 2012. フィールドガイド 日本の野鳥 増補改訂版. pp. 66–69, 76–81. 公益財団法人 日本野鳥の会. 東京.
- 田窪憲一郎・鈴木貴大, 2016. 2016 年度の野毛山動物園における傷病鳥獣救護事業について. 動物園研究会報 2016 (1): 143–144.
- 富田直樹・岩見恭子・藤山愛子・服部花奈子, 2017. 中国地方岡山県におけるアカオネッタイチョウ *Phaethon rubricauda* の初記録. 岡山県自然センター研究報告, (24): 1–4.
- Tuck, G., & H. Heinzel. 1978. A field guide to the seabirds of Britain and the world. pp. 292, William Collins Sons, Glasgow.

田窪憲一郎・小野香織・百武真梨子・宗正敏子・五十嵐真由美・齋藤信：横浜市立野毛山動物園